

残された「文」の行方

——歌物語から『源氏物語』へ続く「語り」の問題——

勝 亦 志 織

はじめに

平安時代の物語文学において、「文」の存在は多く描かれる。^①もちろん、物語に限定せずとも日記文学や歌集の中にも多数登場する。^②では、それらの「文」は受取人が読んだのちにどう処分されたのだろうか。そもそも、「文」とは書かれたものである以上、形として残る。形として残ったものが、どう扱われるのか、本稿では歌物語、特に『大和物語』から『源氏物語』への流れを確認し、「語り」の問題について考察していきたい。

作品内に登場する「文」は、登場人物の手元に届けられ、

そして、われわれ読者もその内容を知る受取人の一人となる。「文」の持つ問題系は複雑に広がり、^③各作品における手紙論が繰り広げられている。だが、本稿ではそうした作品内における「文」の持つ意味だけではなく、書かれたものが残された時、それがどのような効果を後に与えるのか、ということを考えてい。

一、「文」の様相

平安時代の作品において、「文」はどのように描かれたのだろうか。例えば『蜻蛉日記』では、「文」の誤配をめぐるやりとりが描かれる。

さて、そのころ、帥殿の北の方、いかでにかありけむ、ささのところよりなりけり、と聞きたまひて、この六月どころとおぼしけるを、使ひ、もてたがへて、いまひとところへもていたりけり、取り入れて、はたあやしともや思はずありけむ、返りごとなど聞こえてけり、と伝え聞きて、かの返りごとを聞きて、ところたがへてけり、いふかひなきことを、またおなじことをものしたらば、伝へても聞くらむに、いとねぢけたるべし、いかに心もなく思ふらむとなむ、騒がるる、と聞くがをかしければ、かくてはやまじと思ひて、さきの手して、

山彦の答へありとは聞きながらあとなき空を尋ねわびぬる

と浅繚なる紙に書きて、いと葉しげうつきたる枝に、立文にしてつけたり。(中巻 一八丁一八三)

作者が出家した帥殿の北の方(兼家妹で源高明室の愛宮)に長歌を贈るも、その返事を使ひの者が間違えて「いまひとところ」(時姫)の所に届けてしまふ。そのことが判明して愛宮が慌てていると聞いた作者が再度、和歌を贈った場面である。この「文」のやりとりは、そもそも作者が自分からの

「文」であることを隠し、「多武の峰より」と愛宮の同母兄である藤原高光からのものであると思わせて贈ったことに始まる。愛宮側は「文」の送り主は作者であると見抜いたものの、傍線部のように使いの者が届け先を間違えてしまふ。その上、時姫側では愛宮からの「文」を疑問に思わなかったのか、愛宮に返事を出すことで、愛宮側は届け先を間違えたことに気付くのである。そうした情報を作者がどのように知ったのか不明だが、この届け間違いにより、再び作者は和歌を贈る。それが「山彦の」の歌である。

この後、やや時間がかかるが今度は「たしかなるたより」を探して、愛宮から作者のもとに返事が届けられる。愛宮からの返事は「薄鈍の紙にてむろの枝」につけたもの、さらなる作者からの返事は「胡桃色の紙に書きて、色変はりたる松」につけたものであることも明示され、凝った体裁で「文」がやりとりされていたことがわかる。

一方、忠実に「文」を届ける使いの姿は『和泉式部日記』に描かれる。

「さは、今日は喜れぬ、つとめてまかれ」とて御文書かせたまひて、賜はせて、石山に行きたれば、仏の御前に

はあらで、ふるさとのみ恋しくて、かかる歩きも引きかへたる身の有様と思ふに、いとも悲しうて、まめやかに仏を念じたてまつるほどに、高欄の下の方に人のけはひすれば、あやしくて見下ろしたれば、この童なり。あはれに思ひがけぬところに来たれば、「なにぞ」と問はすれば、御文さし出でたるも、つねよりもふと引き開けて見れば（四三、四四）

この場面は、帥宮から和泉式部宛の文を小舎人童が石山寺まで届けた場面である。都から石山寺までの道のりを経て届けられた文であるが、この後、和泉式部からの返事を見た帥宮は石山寺から戻ってきた童に「苦しくとも行け」と命じ、再び石山寺まで和泉式部宛の文を託す。童にとつては都から石山寺まで二往復させられたわけである。忠実に文を届ける姿が描写されていると同時に、距離のある所へ届けられた文に対し、いつもよりも素早く反応する和泉式部の様子もうかがえ、「文」の持つ力を示す場面ともいえよう。

「文」とはこうした使いによつてもたらされるものであった以上、誤配や遅延が常につきまとうものであった。右記のような『和泉式部日記』の小舎人童は非常に忠実な文使いな

のである。⁽⁴⁾ 誰に「文」を託すのか、託された人物は送り手の意図する相手に届けられるのか、モノとして後に残つてしまふ「文」だからこそ、送る手段としての使者は重要な意味を持つ。

次に、モノとして残る「文」はメッセージを伝えるという役目を終えた後、どうなるのか。『枕草子』「うれしきもの」に次のような表現がある。

人の破り捨てたる文を継ぎて見るに、同じつづきをあまたくだり見つづけたる。（三八七）

他人が破つて捨てた文を継いで、何行も続けて読むことが出来たことを「うれしきもの」として挙げているのである。現代から考えるといささか怖いようにも感じる行動であるが、ここにはそもそも「文」は公開性を持つものであるという概念がある。自分の所に来た「文」を他者に見せる、あるいは他者のもとに届いた「文」を見るといった行動は、『枕草子』中にも見受けられるし、他の作品においても描かれている。⁽⁵⁾

前述した『蜻蛉日記』の作者と愛宮の「文」のように、紙を選び、筆跡にこだわりの付け枝にも工夫を凝らすようなものから、破つて捨てられたものまで、「文」は常に複数の受

取人をもっているものであることを、多くの作品が物語っている。複数の受取人とは、「文」の内容と無関係の人物を含む。そして、モノとして残る性質を持つ以上、時間を隔てた後の受取人にも「文」が届くことが起こりうるのである。

時間を隔てた受取人に届いた「文」の例として、『源氏物語』の薫に手渡された柏木と女三の宮の文が挙げられる。時間も空間も隔てられた相手へ届く「文」。書かれたモノとしてあることを最大限利用した「文」である。

二、歌物語を構成する「文」

『伊勢物語』の例

歌物語である『伊勢物語』と『大和物語』はその章段の多くが「文」のやりとりを描写したものである。もちろん、独詠や複数の人が歌を詠み合う唱和の場面もあるが、時間・空間を越えた和歌のやりとりも多い。その中でも明らかに「文」の形態を取ったと考えられるものが多いのである。

歌物語である以上、どの章段も和歌を含むストーリーである。そうした物語を描出するのに、「文」のやりとりは描き

やすい情景であるうが、「文」の内容が明示されるという点について、改めて注目したい。例えば『伊勢物語』には次のような章段がある。「身を知る雨」の歌語で有名な第一〇七段である。

むかし、あてなる男ありけり。その男のもとなりける人を、内記にありける藤原の敏行といふ人よばひけり。されど若ければ、文もをさをさしからず、ことばもいひしらず、いはむや歌はよまさりければ、かのあるじなる人、案をかきて、書かせてやりけり。めでまどひにけり。さて、男のよめる。

つれづれのながめにまさる涙河袖のみひちてあふよし
もなし

返し、例の男、女にかはりて、

あさみこそ袖はひつらめ涙河身さへ流ると聞かば頼
まむ

といへりければ、男いといたつめでて、いままで巻きて、
文箱に入れてありとなむいふなる。男、文おこせたり。
得てのちのことなりけり。「雨の降りぬべきになむ見わ
づらひはべる。身さいはひあらば、この雨はふらし」と

いへりければ、例の男、女にかはりてよみてやらす。

かずかずに思ひ思はず問ひがたみ身をしる雨はふり
ぞまされる

とよみてやりりければ、みのかさも取りあへで、しと
どにぬれてまどひ来にけり。(二〇五―二〇七)

ここでは、藤原敏行への返事は記されていない最初の返事も、「あさみこそ」詠も「かずかずに」詠も全て傍線部に示したように女に代わって「あてなる男」が詠んだ歌である。最初の傍線部に「書かせて」とあるので、筆跡は女のものであっただろうが、敏行は「あてなる男」の代作の和歌によって「めでまどひ」、さらには「文」を文箱に保管し、雨の中を「みのかさも取りあへで」濡れながら、女のもとにやってくる。

「あてなる男」の詠んだ和歌によって二人の恋が結実していくわけであるが、ここでは文面や和歌が代作である、という点に注目したい。「文」の中身は別人が作成していたという実態があったことを示していることになる。もちろん、親や乳母、側近の女房たちが和歌を代作することは多く行われただろうし、日記や物語内にもそうした事例は多く見受けら

れる。ここで、注目しておきたいのは、代作であったことが暴露される形で、この章段が構成されていることだ。代作の暴露は、「あてなる男」の女への配慮とその和歌の力を称賛するという面もあるが、一方の敏行は女の和歌的教養を見抜けず、語り手の語る現在まで「あさみこそ」詠の書かれた文を文箱に入れて保管しているという滑稽さも示されていると理解することも可能であろう。⁶⁾

さて、この三首はいずれも『古今集』掲載歌である。『古今集』卷十三恋三所収の「つれづれの」詠と「あさみこそ」詠、卷十四恋四所収の「かずかずに」詠が、三首まとめて一つの物語を成している。どの歌の詞書も『伊勢物語』の内容と同様である。⁷⁾

しかし、このように三首まとめて物語化されたこと、そして和歌を贈られた敏行が取った行動、さらには、表記されていない最初の和歌の贈答の結果が示されることで、敏行と彼が懸想した女性、そして「あてなる男」の関係性はより具体的にとなった。敏行が女の詠歌に常に反応していることで和歌の素晴らしさが示されており、一見、代作を見抜けない敏行の凡庸さが示されているようでありながら、描かれていない

一首を含め「あてなる男」の和歌が敏行によって称賛されているのである。むしろ勅撰集歌人である敏行であることを明示している以上、敏行は代作を見抜いた上で、「文」を文箱にしまうという行動を取っているのかもしれない。

この章段において、代作が暴露されていることもう一つ注目したいのは、代作された「文」が保管されていることが語られていることである。二重傍線部で示した「男」といたうめで、いままで巻きて、文箱に入れてありとなむいふなる。」という記述内容は、『古今集』の詞書にはない。『伊勢物語』における物語化によって新たに語られた内容ということになるが、ここに「文」が保管されていることが伝聞形式でありながらも示されることで、語りの「今」にいたるまで、その「文」は保管されていたことになる。『伊勢物語』における語りの「今」をどこに置くのかという問題はあるが、贈答の後であることは確実であり、ここに時間の経過が物語内に示されることになる。そして、この時間の経過を語るということは、代作が暴露されることと無関係ではない。詠歌を記したモノが残っているということは、暴露できる証拠が残っているということになるからだ。「文」の保管ということは

時間を越えて、書かれたモノにまつわる何らかの事実を証し立ててしまうことにつながる。

では、『伊勢物語』以上に「文」を多く描く『大和物語』では、どのような書かれた「文」が残っているのだろうか。次節において確認したい。

三、『大和物語』における公開された「文」と「語り」

『大和物語』はいわゆる「歌語り」の集成であるとされる。和歌とその詠歌状況が口承の場で語られ、それが記述されたのが『大和物語』であるというものであり、『大和物語』に係助詞「なむ」の使用が多いことにより「語り」の性格が強いことが指摘され、歌集における詞書の発展ではないことが指摘されている⁽⁸⁾。だが、我々の目の前にある『大和物語』は書かれたテキストであり、口承の場はあくまでも書かれたものの先にしか浮かび上がらない。しかし、一方で口承の場がなかったという証明も不可能であり、ここに『大和物語』を読解するときの難しさがある。加えて、『大和物語』はその

章段の多くが実名表記であり、実名が記されていることは実体的な歴史とつながりやすく、そこに「歌語り」の場合はより強く幻視されてしまう。だが、そもそも『大和物語』はその「語り」の情報源の一つを作品内に示しているのではないのか。「文」という情報源を。

そうだとすると、『大和物語』の「語り」の構造は複雑化する。書かれたモノとして残っている「文」を情報源として「歌語り」が発生し、そしてその「歌語り」を再生するよう書かれたモノが『大和物語』になるからだ。もちろん、例えば第二十九段のように三条右大臣が複数の人々の前で和歌を披露したというような、ある場面における唱和の一首または複数首が記されるような章段もある。だが、『大和物語』の章段の多くは何らかに書かれた和歌を取り上げることが多く、そうした章段にとって「文」と「語り」の関係は無視できない。

では、具体的な章段を見て行きたい。最初に取り上げる第六十一段は不特定多数の受取人を生じさせた「文」が描かれる。

亭子院に、御息所たちあまた御曹司してすみたまふに、

年ごろありて、河原院のいとおもしろくつくられたりけ

るに、京極の御息所ひと所の御曹司をのみしてわたらせたまひにけり。春のことなりけり。とまりたまへる御曹

司ども、いと思ひのほかになうさうしきことをおもほしけり。殿上人など通ひまゐりて、藤の花のいとおもしろきを、これかれ、「さかりをだに御覽ぜで」などいひて見歩くに、文をなむ結びつけたりける。あけて見れば、

世の中のおさき瀬にのみなりゆけば昨日のふぢの花
とこそ見れ

とありければ、人々見て、かぎりなくめであはれがりけれど、たが御曹司のしたまへるともえ知らざりける。男どものいひける。

藤の花色のおさくも見ゆるかなうつるひにけるなこ
りなるべし（二九三）

宇多院が河原院に移り、亭子院に御息所たちが残された後、藤の花の盛りに殿上人たちが訪れると、藤の花に文が結び付けられ、そこに和歌が書き記されていた。差出人不明の「文」でありながら、この「文」を見た殿上人は「人々」と複数であるから、受取人は複数いたことになる。殿上人たちの詠

んだ和歌そのものはどこかに書き記されたものではないが、藤の花に結ばれた「文」は殿上人たちに見つけてもらうのを待っていた「文」だといえる。

この「文」を書き、藤の花に結び付けるという行動は、書かれたモノとしての「文」の持つ特性が活かされたものであっただろう。モノとして存在するがゆえに、「文」の一次的な受取人となった殿上人たちの誰かが宇多院に届ける可能性、あるいは「文」の受取人が複数いることにより、せめてこうした行動があったこと、または和歌内容が宇多院の耳に入る可能性に賭けた「文」である。そして、もし宇多院のもとまで、この「文」が届けられたのであれば、その筆跡によって差出人が判明した可能性もある。しかし、この章段はそうした結末ではなく、この「文」の書き手にとっては、いささか辛辣とも言える「藤の花」詠を擬似的に返歌するという結末を示す。それは、殿上人たちが亭子院の藤の花を見に来たという現場性に特化した和歌を詠んだからであろう。一通の書かれた「文」をもとに、受取人が和歌を擬似的に返すことで、それが「歌語り」を経て、その空間と和歌が詠まれた時間を再生するかのような語りとして記されたのが、この第六十一

段だと言えるのではないだろうか。

こうした、「文」が不特定多数に見られることを意図したものと異なり、本来であれば、秘匿されたであろう「文」が描かれる章段もある。近江介平中興の娘と浄蔵大徳を描く第一〇五段である。

中興の近江の介がむすめ、もののけにわづらひて、浄蔵大徳を験者にしけるほどに、人とかくいひけり。なほしもはたあらざりけり。しのびてあり経て、人のものいひなどもうたてあり。なほ世にあり経じと思ひてうせにけり。鞍馬といふ所にこもりていみじう行ひをり。さすがにいと恋しうおぼえけり。京を思ひやりつつ、よろづのこといとあはれにおぼえて行ひけり。泣く泣くうちふして、かたはらを見れば文なむ見えける。なぞの文ぞと思ひてとりて見れば、このわが思ふ人の文なり。書けることは、

すみぞめのくらまの山に入る人はたどるたどるもかへり来なむ

と書けり。いとあやしく、たれしておこせつらむと思ひをり。もて来べきたよりもおぼえず、いとあやしかりけ

れば、またひとりまどひ来にけり。かくて山に入りけり。さておこせたりける。

からくして思ひわする恋しさをうたて鳴きつうぐひすの声

返し、

さても君わすれけりかしうぐひすの鳴くをりのみや
思ひいづべき

となむいへりける。また、浄蔵大徳、

わがためにつらき人をばおきながらなにの罪なき世
をや恨みむ

ともいひけり。この女はになくかしづきて、みこたち、
上達部よばひたまへど、帝に奉らむとてあはせざりけれ
ど、このこといできにければ、親も見ずなりにけり。

(三二九～三三二)

ここでの浄蔵と平中興の娘との出会いは加持祈祷の場であり、二人の関係が人々の噂になり、浄蔵は鞍馬に姿を隠すが、そこにどうやって届いたのか不明な「文」が届き、それがもとで浄蔵は再び、女のもとに会いに行ってしまうのである。

ここでの「文」の持つ力は、二で見た『伊勢物語』の用例の

ように、離れている男性を自分のもとに引きつける力である。しかし、この浄蔵との恋は中興の娘にとっては身の破滅であり、親にも見限られてしまったことまでもが語られている。

中興の娘は続く第一〇六段で、まだ浄蔵との関係がなかった頃の話として、元良親王に言い寄られた話が載っている。元良親王との十首に渡る贈答歌が描かれ、ほぼ同内容が『元良親王集』にも収載されている。加えて、次に引用する第五十七段では、第一〇五段の後日譚とも思えるような話が載せられている。

近江の介平の中興が、むすめをいたうかしづけるを、親なくなりてのち、とかくはふれて、人の国には
かなき所にすみけるを、あはれがりて、兼盛がよみてお
こせたりける。

をちこちの人目まれなる山里に家居せむとはおもひ

きや君

とよみてなむおこせたりければ、見て返りこともせで、
よよとぞ泣きける。女もいみじくらうある人なりけり。

(二八九)

第一〇五段の段階ですでに親に見限られていた中興の娘は、

親の死後に落ちぶれて他国に住んだことが語られる。ここでは中興の娘を「いみじくらうある人」と、第一〇五段の末尾にあったように、両親が大切に育てていたこととつながるような記述があり、大切に育てられた女性が僧侶との恋をきっかけに落ちぶれ、都に住むことすら出来なくなったということが、複数の章段を重ねることで見えてくる。

しかし、ここで問題であるのは、第一〇五段における「文」である。中興の娘からの「文」は浄蔵にとつても、どうやって届けられたか不明な「文」であった。浄蔵に知られずに届けられるような機転の利く使者によって届けられたと考えられるが、ここは本来であれば秘匿されるべき「文」のメタファーではないのか。二人の関係が噂に立ったからこそ、浄蔵は鞍馬に籠もったのであり、二人の関係はこの先続けていくのが困難な状況であった。その困難な状況の中でやりとりされた「文」が、この章段の中で明らかにされた四首の和歌であるが、状況を考えれば、全て秘匿されるべき「文」である。しかしながら、章段の最後に描かれているように、結局は秘匿されるべき関係が明らかになったことで、中興の娘は親から見放され、さらには第五十七段が示すように落ちぶれてしまっ

たのである。

歴史上の浄蔵は様々な説話に彩られた存在ではあるが、加持祈祷に効力のある天台僧であった。中興の娘との恋も実際にあったものであるかは分からない。しかし、僧侶との恋で大切に養育されていた貴族の娘が零落するという話を、『大和物語』の「語り」は、秘匿されているべき二人の間に交わされた「文」を一つの証拠として提示することで、信憑性の高い話としているのである。

『大和物語』には僧侶との恋が多く描かれ、ここで登場する浄蔵大徳も第六十二段では、のうさんの君という女性との恋が描かれている。その他、ゑしうという僧侶と名を記さない女性二人との恋（第四十二段、第四十四段）、増喜君としこの恋（第二十二段）などが挙げられる。このうち、ゑしうの恋を語る第四十二段では、女性に対して敬語が使用されており、身分の高い女性との恋であることがわかる。あえて名前を明示せず「ある人」として語られているのも女性の身分の高さを暗示しているよう。『伊勢物語』が后妃や斎宮との禁忌の恋を描いたのに対し、『大和物語』は禁忌の恋のイメージを僧侶と貴族女性の恋にほのめかしながら描いているので

はないだろうか。そうした秘すべき関係を明らかにしてしま
うのが他ならぬ「文」であるのだ。

『大和物語』の「語り」は、「文」を一つの情報源として示
しながら、同時に「文」はやりとりをする人物達の関係性を
示すための証拠としても使っている。『大和物語』の章段の
多くが「文」のやりとりによって成り立っていることは、や
りとりする人物達の関係を明確に示すことができるからであ
る。友人同士・恋人同士、夫婦や血縁、主人と仕える者など、
さまざまな人間関係の間を「文」は飛び交い、他者にも開示
されているのである。そして、他者が「文」を見ること、そ
こから口承の世界が立ち上がる可能性を『大和物語』は示し
ている。

しかし、『大和物語』はあくまでも、書かれた作品である。
口承のまま書き取られたものではなく、書かれたものとして
編集されているといえよう。『後撰集』や各私家集との比較
検討により、そうした結果は見えてくるが、問題はなぜ、
「文」を媒介にした形で語られたものを書き記す、という形
式を『大和物語』が持っているのか、ということである。こ
この点については稿を改めて考察することとし、こうした

『大和物語』を始めとする歌物語の持つ形式がその後の作品
具体的には『源氏物語』に引き継がれていくことについて考
察したい。

四、「文」の公開と「語り」の問題

二・三で見たように、歌物語において「文」は人間関係を
明らかにしてしまう一つのツールであった。それは書かれた
モノとして残ってしまうがゆえに、エピソードの証拠となる
からだ。公開性を持つという特性ゆえでもある。秘すべき
「文」もモノとして存在してしまつたために、秘すべき人間関
係をも明らかにしてしまう。そして、「文」をツールとして
語られている物語であることを考えた時、「文」を利用しな
がらも物語内で処分されることまで語る『源氏物語』が浮か
び上がる。

例えば幻巻で源氏は紫の上からの文をはじめとする「落ち
とまりてかたはなるべき人の御文ども」（幻 五四六）を焼
却する。また、浮舟も失踪直前、「むつかしき反故」（浮舟
一八五）を焼却したり水に投げ入れたりして処分する。幻巻

の場面で『後撰集』収載の元良親王の和歌「やれば惜しやらねば人に見えぬべし泣く泣くも猶返すまされり」（巻第十六雑二、一一四三番歌）が引歌として載るが、この和歌の詞書は「たまさかにかよへる文を乞ひ返しければ、その文に具してつかはしける」というものであり、同歌は『元良親王集』¹²においては詠者は京極御息所であり、文を元良親王に返却する際に詠まれたことになっている。『元良親王集』の記述通りであれば、このやりとりは『百人一首』の元良親王の和歌（わびぬれば今はた同じ難波なる身をつくしても逢はんとぞ思ふ）でも有名な二人の密通事件にまつわる「文」の処分についてのやりとりになる。もちろん、そのように認定しなくても、恋文の返却であることには変わりなく、「やらねば人に見えぬべし」とあるように、「文」が他者に見られることを懸念しての行動であった。

このように、身辺整理の際に秘すべき「文」は他者の目に触れないよう注意深く処分されている。それは、他者の目に触れることにより、「文」に書かれていた内容が流出するからである。そうした情報流出の可能性は先に見た歌物語において示唆されていた。特に『大和物語』においては、「文」

を情報源とした話が多く語られている。『源氏物語』成立前、「文」を情報源として語られる世界が広がっていたのである。つまり、一で示したように「文」は常に複数の受取人を持ち、そして「文」そのものではなくても、その情報は複数の受取人から拡散する可能性を多分に秘めていたのである。

さて、『源氏物語』における「文」についての考察はすでに様々に成されている。¹³物語内において、一通一通の「文」の持つ意味は大きいと思われるが、その中で「文」と語りの関係について論じたのが陣野英則氏の一連の論考である。¹³物語中に存在する手紙について、その処分と処分に関わる女房たちに注目し、女房たちが主要人物のもとに届いた手紙の内容を見、「物語本文は、殊更にそのことに言及しているようでもある。それは物語生成にいたる経緯を示唆しているとも理解されよう。」とし、「書かれたもの」としての物語の中に、まさに入籠型で、音声以前の書かれたものとして、仮名の手紙も在る。¹⁴と述べる。さらに、帚木巻と朝顔巻の記述をもとに、次のようにまとめられている。¹⁵

まずは紙に書かれた歌と言葉があること、その書かれたものにもとづく「うわさ」が語られる、という順

番であること。これは、『源氏物語』の「語り」と書くことを考える上で相当に重要ではないか。『源氏物語』のような物語文学の基層に口承の世界を想定するような論が、これまでは多勢を占めてきた。ところが、『源氏物語』の本文中では、その口承の世界よりも前に書かれた文字と紙もあるのだということが示唆されている場合がある。（中略）さらに、『歌語り』というものについても、要は手紙に書かれた和歌のやりとりをベースにしているのであれば、それもまた、当然書くことが先行する。和文によってあらわされる世界に対する音声中心主義的なとらえ方を相対化しなくてはなるまい。ここで論じられていることは、『源氏物語』のみならず、二・三で述べてきた通り、歌物語にも当てはまる。傍線部にある「歌語り」についての言及が端的に示している通りである。これまで口承の「歌語り」を前提にしてきたことが、歌物語の書記性を見えにくいものにしていただけないだろうか。改めて物語内の「文」を見直すことにより、口承の世界よりも前に書かれたモノがあることが浮かび上がってくるのである。⁽¹⁶⁾

さて、「語り」以前に書くことが先行することで共通していく歌物語（特に『大和物語』）と『源氏物語』であるが、先ほど示したように、『源氏物語』には「文」の処分や管理が描かれていた。処分または管理されなかった文は、例えば帚木巻で空蝉方の女房たちが、源氏が朝顔の姫君に贈った和歌を噂していたように、まさしく「歌語り」の様相を呈していく。源氏も浮舟も自身の死後、自身にまつわる「歌語り」がなるべく流通しないよう、その証拠たる「文」を処分したと言えるだろう。浮舟の例は確認する術がないが、源氏と紫の上のことであれば、確かに二人の間の「文」に書かれていた情報は第三部の世界では流通していない。⁽¹⁷⁾

加えて、光源氏は自分に関わる「文」を徹底的に管理していた。若菜下巻で柏木と女三の宮の密通を示す「文」を発見した時、源氏は柏木の「文」を誰の筆跡か明確であり、かつ自分の思いをあからさまに綴った杜撰なものとして見下す。かつて自分は「落ち散ることもこそ」（若菜下 二五三）と散らばって人手に渡ることを恐れ、そんなことはしなかったと思いつきながら、藤壺の宮との「文」のやりとりは若紫巻で藤壺の宮が懷妊した際、次のように語られる。

いといみじき言の葉尽くし聞こえたまへど、命婦も思ふに、いとむくつけうわづらはしまさりて、さらにたばかりるべき方なし。はかなき一行の御返りのたまさかなりしも絶えはてにたり。(若紫 一三四)

「いみじき言の葉尽くし」した「文」は柏木と共通する点であり、若菜下巻で源氏が「昔、かやうにこまかなるべきをりふしにも、言そぎつつこそ書き紛らはししか」(若菜下 二五三)と回想すること矛盾はするものの、内容が示されない以上、この言の葉を尽くした手紙であつても、万が一、誰かに見られることを予測しながら、周到にしたためられたものだった可能性はある。そして、藤壺の宮からの返事も絶えたことで二人の恋にまつわる「文」のやりとりは終わり、若紫巻から一貫して藤壺の宮が二人の関係が世語りとなることを恐れたにもかかわらず、二人のことは一切物語世界では流通しない。その代替が朝顔の姫君にまつわる「歌語り」¹⁵なものであり、朝顔の姫君との「文」のやりとりは世間に流通してもかまわないものであつたことを示している。

つまり、「歌語り」になつてもよい「文」と、なつてはならない「文」を明確に区別していたことになる。『源氏物語』

がそつした明確な区別をしたのは、作品生成以前の世界において広がっていた、「文」を情報源とする情報拡散の世界があつたからであらう。『大和物語』が記した、個人名を明らかにし「文」を証拠とする形で情報が拡散する多様な状況を引き受けたからこそ、『源氏物語』は「文」の持つ危険性を十分に理解した上で語ることができたのではないだろうか。しかし、あえて「文」を残した人物がいる。それが柏木である。最後に柏木の問題を考えることでまとめたい。

おわりに 柏木と薫をつなぐ「文」

橋姫巻において、薫は弁から両親の秘密を示す「文」を渡される。弁と共に西国を流浪したあけく薫のもとに届いた「文」である。

ささやかにおし巻き合はせたる反故どもの、微くさきを袋に縫ひ入れたる取り出でて奉る。「御前にて失はせたまへ。我なほ生くべくもあらずなりにとりとのたまはせて、この御文をとり集めて賜はせたりしかば、小侍従に、またあひ見はべらんついでに、さだかに伝へ参らせ

んと思ひたまへしを、やがて別れはべりにしも、私事には飽かず悲しうなん思ひたまふる」と聞こゆ。つれなく、これは隠いたまひつ。かやうの古人は、問はず語りにや、あやしきことの例に言ひ出づらんと苦しく思せど、かへすがへすも散らさぬよしを誓ひつる、さもやとまた思ひ乱れたまふ。(橋姫 一六三)

右の引用において、薫は弁から文の処分を促される。そして、次に引用するのが、その手渡された古い「文」の内容である。

帰りたまひて、まづこの袋を見たまへば、唐の浮線綾を縫ひて、「上」といふ文字を上書きたり。細き組して口の方を結ひたるに、かの御名の封つきたり。開くも恐るしうおぼえたまふ。いろいろの紙にて、たまさかに通ひける御文の返り事、五つ六つぞある。さては、かの御手にて、病は重く限りになりたるに、またほのかにも聞こえんこと難くなりぬるを、ゆかしう思ふことはそひたり、御かたちも変りておはしますらんが、さまざま悲しきことを、陸奥紙五六枚に、つぶつぶとあやしき鳥の跡のやうに書いて、

目の前にこの世をそむく君よりもよそにわかるる魂ぞかなしき

また、端に、「めづらしく聞きはべる二葉のほども、うしろめたう思つたまふる方はなけれど、

命あらばそれとも見まし人しれぬ岩根にとめし松の生ひすゑ」

書きさしたるやうにいと乱りがはしくて、「侍従の君に」と上には書きつけた。紙魚といふ虫の棲み処になりて、古めきたる黴くささながら、跡は消えず、ただ今書きたらむにも違はぬ言の葉どもの、こまこまとさだかなるを見たまふに、げに、落ち散りたらましょとつしるめたう、いとほしきことどもなり。(橋姫 一六四―一六五)

母女三の宮の返事と柏木が死の間際に書いたと思われる「文」が唐の浮線綾の袋に入っていた。柏木は、女三の宮の「文」が自分の死後に流通しないよう返却すると共に、自分の最後の「文」も加えて弁から小侍従に渡すよう依頼したものと思われる。先述した『後撰集』収載の元良親王の和歌と同じ趣向である。しかし、『源氏物語』はさらに残されるという「文」の特色をより効果的に利用し、真実を知るための

証拠として時間と空間を超えてこの古い「文」の数々を薫のもとに届ける。

加えて、届けられた「文」は「ただ今書きたらむ」ようであり、遙か柏木巻の時空を薫の前に立ち上げる。中身を見れば「げに、落ち散りたらしよ」とこれらの「文」が分散し他者の目に触れることに危惧を抱くほどのものである。かつて源氏が見下したように柏木の最後の「文」もまた、長々と自分の思いがあからさまに綴られたものであったのだらう。だからこそ薫はこの「文」を誰にも知られないように管理していくのである⁽¹⁹⁾。

薫のもとに届いた柏木の「文」は届け先こそ柏木の意図とは異なつたが、世間に拡散されることなく回収された。だが、薫にとっては出生の秘密を知る情報源であると同時に、「文」そのものが目の前にあることは父母の秘密、自身の出生の秘密を証拠立てるものでもあった。おそらく、薫の手によつて処分または供養されるのであろうが、書かれたモノが時空を超えた先の受取人に届き、書かれたモノにまつわる事実を証し立てるといふ「文」の特性が最大限に利用されているのである。そしてそれは、「歌語り」的世界を語つた『大和物語』

のさらに先をいく戦略である。

「文」を処分するかしないかは、書かれたモノを後の時代に残すか残さないかということにつながり、残つたものは複数かつ時代を超えた受取人に届いていく。そうした複数の受取人が「文」の内容をどのように語り拡散するのか、差出人はもはや関与できない。こうした「文」の特性は歌物語の中にも「文」を情報源とし、時間を超えた受取人が存在することが示されていること、章段の「語り」の方法としてまず「文」があることから、「語り」と「書く」ことの相関に密接に関わり合っている。そうした文学史的先達を前にして『源氏物語』はより「文」の持つ特性を深化させた。文学史的状态に即した光源氏は「文」の管理を徹底し、それに相反するように見える柏木もまた、「文」の管理という意味では関係者以外の第三者に情報を拡散することはなかった。残された「文」は時空を超え薫のもとに届き、薫の求める真実を提供したのである。

以上、歌物語から『源氏物語』にいたる、情報源としての「文」の特性を考察してきた。歌物語の「語り」は実際に残された「文」をもとに書かれたものもあれば、そうではなく

「文」を語るといふ体裁をとつたものもあるう。しかし、それらは口承の「歌語り」の世界の前に書かれたモノがあることを示し、書かれたものから「歌語り」へ、そしてさらに書かれたものへという流れが浮かび上がってきた。歌物語の全ての章段がこの流れを通過しているわけではないが、こうした「文」を語るといふ体裁をとつた書かれたものの存在は『源氏物語』の「語り」へと吸収され深化していく。歌物語から『源氏物語』の流れは、文体や語りといった問題系においても密接に関連しているのではないか。^⑩「文」にまつわる文学史的流れを見直すことは、『源氏物語』の新たな一面を探ることであり、そして歌物語あるいは九百年代後半の社会における歌語りの世界の流行の意味を再考することにつながるはずである。

『伊勢物語』『大和物語』『蜻蛉日記』『和泉式部日記』『枕草子』『源氏物語』の引用は新編日本古典文学全集（小学館）に拠り、『古今和歌集』『後撰和歌集』の引用は新日本古典文学大系（岩波書店）に拠り、それぞれ巻や歌番号などを示し、頁数を付記した。

注

(1) 本稿において「文」とは作品内に登場する手紙の類を示す。文・消息といった表現から手紙だと判断できるものに含め、手紙を示す語句がない場合にも、「やる」や「おこす」といった表現から手紙だと判断できるものを総体的に示すため「文」の表記とする。

(2) 久曾神昇『平安時代仮名書状の研究』（風間書房、一九六八年）では、実際の仮名書状はもとより物語作品についても考察されており、『竹取物語』五通、『落窪物語』六十七通、『源氏物語』二七一通と数えられている。なお、『うつほ物語』については総数の明記はなく、その他に『枕草子』『紫式部日記』についても考察されている。

(3) 川村裕子『王朝の恋の手紙たち』（角川学芸出版、二〇〇九年）には複数の作品における「文」の様相がまとめられている。

(4) 『和泉式部日記』には、小舎人童が文を上手く届けられなかったことも記されている。四月晦日の日の文で、「人々あまたさぶらひけるほどにて、え御覽せさせず。」（二四）とあり、帥宮は翌朝になってその文を見ることになる。その他にも宮自ら返事の文を持つてくる場面もあり、二人の文のやりとりは多様である。

(5) 『枕草子』では、例えば「頭弁の、職にまゐりたまひて」の段では、頭弁（藤原行成）の清少納言宛の文は中宮定子やその弟である隆円のもとに渡っており、おそらくその前には

定子サロンで皆が回覧したことが容易に推測できる。一方、同じ章段では行成のもとに届けられた清少納言の文は「その文は、殿上人みな見てしは」と公開されたことが語られている。ただし、行成の文については、彼の筆跡に関わる。届けられた文を手本にすることは、『源氏物語』若紫巻で源氏から届いた文を若紫の手本とすることが描かれているが、ここでも行成の文は後に手習の手本となった可能性もある。その他、公開される文については、『うつほ物語』では内侍のかみ巻において、源正頼と藤原兼雅がそれぞれのもとに届いた女性からの恋文を、その入れ物ともども優劣を競う場面があり、恋文であるうとも公開性を持つことが示される。また、『源氏物語』の帚木巻では、頭中将が源氏宛の女性たちからの文を見て、筆跡から人物を特定するなどの場面が描かれ、しかし、頭中将に見せた文は「やむごとなく切に隠したまふべきなどは、かやうにおほぞうなる御厨子などにつち置き、散らしたまふべくもあらず、深くとり置きたまふべかめれば、二の街の心やすきなるべし」（帚木 五五・五六）と語られ、源氏は公開してもよい「文」のみを見せたようである。また『紫式部日記』では、斎院の中將の君の手紙を「みそかに人のとりて見せはべりし。」（一九三）と、紫式部はひそかに見ているし、『紫式部集』では、夫藤原宣孝が自分の書いた文を他人に見せているとして返却を要求する和歌のやりとりが見える。このように、文は個人が秘匿するものではなく、公開性を持つものであった。

(6) この代作の贈答が滑稽に感じられるのは、実際は男性同士の恋の贈答歌であるということが理由の一つでもある。

『伊勢物語』には他にも男性同士の贈答歌があり、この章段の問題として男性同士の贈答歌の持つ意味について、今後検討したい。

(7) 『古今集』での詞書き及び本文は以下の通りである。

業平朝臣の家に侍ける女のもとに、よみて、
遣はしける 敏行朝臣

617 つれづれのながめに増さる

涙河袖のみ濡れて逢ふよしもなし

かの女に代りて、返しに、よめる

業平朝臣

618 浅みこそ袖はひつらめ涙川

身さへ流ると聞かばたのまむ

藤原敏行朝臣の、業平朝臣の家なりける女をあひ知りて、文遣はせりける言葉に、今まうでく、雨の降りけるをなむ見煩ひ侍と言へりけるを聞きて、かの女に代りて、よめりける 在原業平朝臣

705 かずかず思ひおもはず問ひがたみ
身をしる雨は降りぞまされる

(8) 「歌語り」の口承性について論じたのは益田勝実『上代文学史稿』案(二)（『日本文学史研究』第四号、一九五〇年六月）、「歌語りの世界」（『季刊国文』第四号、一九五三年三月）、「説話文学と絵巻」（『三書房』一九六〇年）であり、その後、「物語文学と歌がたり」（『体系物語文学史』第一巻、

有精堂、一九八二年)において、研究史的に整理されている。その他、「歌語り」について、久保木哲夫「大和物語と歌語り」(鑑賞日本古典文学 伊勢物語・大和物語、角川書店、一九七五年)、雨海博洋「歌語りと歌物語」(桜楓社、一九七六年)、片桐洋一「歌語りの世界」(国文学、二六卷十二号、一九八一年九月)、などがある。雨海博洋、神作光一、中田武司編『歌語り・歌物語事典』(勉誠社、一九九七年)では「歌語り」の研究史がまとめられている。論文中で指摘した

文体の問題については、阪倉篤義「歌語りの文章」「なむ」の係り結びをめぐる(「国語国文」一二卷六号、一九五三年六月)が論じている。益田が前掲「物語文字と歌がたり」の中で述べているように、歌語りの「文字化」の中身と広がりの問題は難しく、本稿では「文」という書かれたモノが語りの中に組み込まれている点を「文字化」＝書かれたモノとしての『大和物語』を考える上での起点としている。

(9) 拙稿「『大和物語』における桂の皇女関連章段採録の意図」(『古代文学研究 第二次 第二十五号、二〇一六年十月』)において、『大和物語』に登場する皇女に関する歌話採録にあたり、「歌語り」を「書き記す」ためのメモとして公開性をもつ文を利用した可能性を、文を媒介とする章段を多く採録する『大和物語』自ら表現している点から指摘した。

(10) 他に『大和物語』において禁忌の恋のイメージが付加されているのは、皇女が挙げられる。特に前掲(9)で論じた桂の皇女は同母兄をはじめとして複数の男性との恋の贈答が語

られている。なお、『伊勢物語』の斎宮との恋を意識したのか、斎宮と臣下の恋も描かれているが(第九十三段) 斎宮卜定により悲恋に終わるという形をとる。

(11) 拙稿「『大和物語』における 記録 の方法 歌話採録に見える戦略」(『日本文学』第六十五巻第五号、二〇一六年五月)において、歌集との比較から『大和物語』における歌話採録の方法について論じた。なお、稿者は「歌語り」そのものを否定するわけではないが、『大和物語』にまつわる様々な事象を「歌語り」に収斂させて考える方法に懐疑的である。『大和物語』が書かれたものである以上、そこに語られているものも「語り」を装ったエクリチュールに他ならない。「歌語り」の概念について、他ジャンルの作品との関わりを精査しつつ、再び考え直す時期に来ているのではないだろうか。「歌語り」については、語りや書記の問題と合わせて今後も考察していく予定である。

(12) 『源氏物語』の手紙論として、久曾神昇「源氏物語の書状」(『源氏物語と和歌 研究と資料 古代文学論叢第四輯』武蔵野書院、一九七四年)や、田中仁の「源氏物語の手紙 数と形と」(『親和女子大学研究論叢』二二号、一九八八年)など一連の論考などをはじめとして、高木和子「手紙から読む源氏物語」(『女から読む歌 源氏物語の贈答歌』青簡社、二〇〇八年)が概要をまとめている。その他に山田史子「源氏物語における手紙の位相」(『玉藻』三二号、一九九六年三月)、助川幸逸郎「消息のことは 物語文学の中の手紙 その「物

質的要因」をめぐる」(『国文学 解釈と教材の研究』四五巻十号、二〇〇〇年十月)、坪井暢子「源氏物語の手紙」(新時代の源氏学「構築される社会・ゆらぐ言葉」竹林舎、二〇一五年) などがある。

(13) 陣野英則氏の手紙にまつわる一連の論考は次の通りである。

「手紙から『源氏物語』へ」「朝顔」巻の「草子地」より」(『日本文学』五十五巻一号、二〇〇六年一月)、「『源氏物語』「梅枝」巻の書、書物と手紙「雨夜の品定め」との照応を手がかりに」(『源氏物語の言語表現 研究と資料 古代文学論叢第十八輯』武蔵野書院、二〇〇九年)、「語り手以前の言葉『源氏物語』「須磨」巻の場合」(『むらさき』第四九輯、二〇一二年十二月) なお、全て同氏『源氏物語論 女房・書かれた言葉・引用』(勉誠出版、二〇一六年) に所収。この論を執筆するにあたり、大きな示唆を得た。

(14) 前掲(13) 著書、一二四―一二五頁

(15) 前掲(13) 著書、一四一頁

(16) ここでの書かれたモノは、「歌語り」が提唱される以前、歌物語の物語化の要素として考えられていた歌集の詞書等ではない。もちろん、『後撰集』や私家集との関わりを考えた時、『大和物語』の各章段の生成に歌集の詞書が関与していることは間違いないが、ここでは仮にそうした歌集の詞書を素材としても「文」の形式によって語られていることを問題にしている。

(17) 前掲(13) で陣野氏は、幻巻において焼却された文は源氏

が須磨・明石に退去していた時の文であること、その文の中には須磨・明石両巻で一部が語られる紫の上の文が含まれていた可能性を示し、幻巻で文の処分を手伝うことで文の自身を見ることのできた女房が須磨・明石両巻の語りを担う存在であることを論じている。

(18) 光源氏と朝顔の姫君の「文」のやりとりについては帚木巻で歌語り化しており、その生成されるタイミングが早い。これは朝顔の姫君側の管理が甘いというよりも、管理すべき(秘匿すべき)「文」ではなく、ましてや処分してしまえるものでもなかったことを暗示していよう。二人の関係が世間で語られても何の支障もなく、むしろ、積極的に話題にされた結果、空蟬の女房たちであつても知ることができそうな情報(ただし、間違いを含む情報)拡散のありようにつながったのだと考えられる。

(19) 薫と柏木の「文」の関わりについて、陣野英則「物語の切っ先としての薫『源氏物語』「橘姫」「椎本」巻の言葉から」(『国語と国文学』八五 五、二〇〇八年六月。前掲(13) 著書に所収) に示唆を得た。なお、柏木の「文」については、竹内正彦「もののけの幻影 柏木の絶筆をめぐる」(『王朝文学史稿』十六号、一九九〇年十二月)・「柏木の文 封じ込められた最後の手紙をめぐる」(『文学』第十六巻第一号、二〇一五年一月)、岩原真代「物語の求婚者達と消息 柏木の「あはれ」の希求と文字信仰から」(『野州国文学』第七九号、二〇〇七年三月。後、同氏『源氏物語の住環

境 物語環境論の視界 “（おうふう、二〇〇八年）所収。）
などがある。

（20） 文体の関わりについては、池田和臣「源氏物語の文体形成
仮名消息と仮名文の表記」『国語と国文学』七九 二、二
〇〇二年二月）が歌と地の文の融合が仮名消息に多く見られ
ることを論じられている。散文と和歌の融合する文体につい
て、『伊勢物語』には見いだされるものの、特殊な例を除い
て『大和物語』や『平中物語』には全く見られないことを山
本登朗「伊勢物語における散文と和歌 連接形式の意味」
『説話論集第九集 歌物語と和歌説話』清文堂出版、一九九
九年）・「源氏物語への回路 伊勢物語第六段の再検討から」
（『京都語文』二三号、二〇一六年十一月）がすでに論じられ
ている。こうした諸先学をもとに、『大和物語』における語
りと文体については今後も考察を続けていきたい。

（文学部講師）